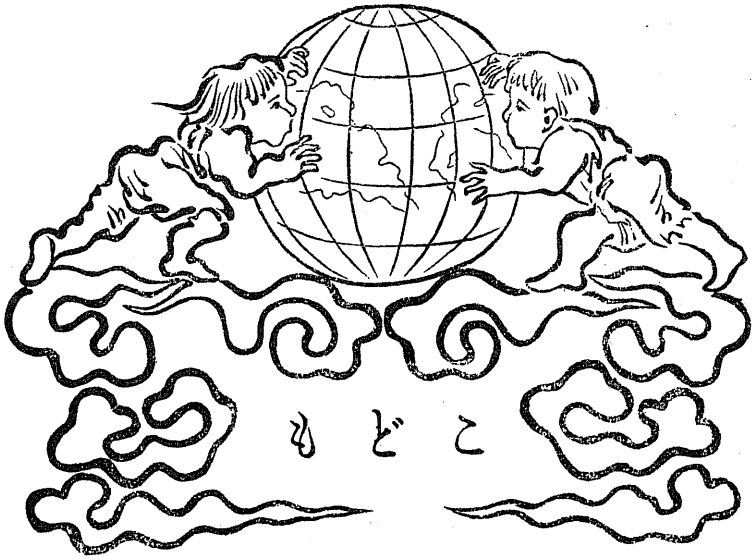


も どり と 人 婦  
號 貳 第 卷 參 第



打出の小道具 (ついき)

やまとの翁

さらば、一奮發して、この老爺のために、惡漢を退治してやろーとゆー氣になつたから、龍吾は、その金槌を貰つて、そこを出て、やがて惡漢の住家の方へと急ぎました。

行く道々でも龍吾は、い

ろくくと計畧はかりごとを考かんがえて居います。何なにでも まづ其その不よ思し儀ぎな法は螺ら貝かい

とゆーのを、奪うばい取とつて置かかないと、ひよつとかして夫それを吹ふか

れて、數あしれぬ手て下したどもが顯あわかれては、面めん到ただからとゆーので

だんくくと其その計はかりごと略りゃくを考かんがえながら行いきました。

暫しばく行いつた所ところが、とーく一いつ軒けんの家いええ行いき當あたつた。これが

其その男おとこの住す家かなんです。龍りゅう吾ごが、案あん内ないを乞こへて這は入いつて見みると、

何なにさま惡わる漢いらしい男おとこが一人ひとりで、火ひを燒やいて、どこかで盜ぬすんでき

たのでしょー、餅もちなど燒やいて食たべて居います。

龍りゅう吾ごわ ちゃんちゃんと計はかりごと畧りゃくを定さめて居いますから、ピクともしませ

んで、其その側そばえ行いきまして、

『やー、伯おやじ父ちやうさん、何なにかで馳ち走そくして上あげよーか』

といーますと、其男わギロく眼を光らせて 龍吾の身なりを見回わしながら、

「フン 御馳走して欲しいのだろー」

といーますから、龍吾わ早速、例の古手巾を二三度振った所が、以前の様に チャンと御馳走がそこに并んだので、さー其大將、吃驚した、で、龍吾わ、

「ね、伯父さん、この通りだ、この手巾から 何でも好きな御馳走が出るんだよ、さー ね上んなさい」

とゆーもんだから 其男も、「これわ」とゆーので、夢中になって 飲んだり食べたりして居ます。

其隙を伺って、龍吾わ、例の金槌を、そーと一ったゝいた

所が、いきなり大の男が一人、ひょいとそこえ出て來まして、  
 龍吾に『何か御用でございますか』と聞きますから、龍吾又そ—  
 っと『急いで奥へ行つてこの男の法螺貝を取つて來い』と言—付  
 けますと、『畏まりました』といつて引き下がつたが、暫くすると、  
 大きな法螺貝を持つて來て、龍吾に渡しました。惡漢はも—夢  
 中で飲んだり食つたりして居ますから、一向そんなことに氣が  
 つかない。

さ—これさえ取つてしまえば、大丈夫だと思つて、龍吾又  
 其男にい—つけた。『すぐ此惡漢を縛つて仕舞え』しきりに酒  
 に酔つぱらつて居た惡漢は、すぐ其男に取つてれさえられまし  
 た。

それから、龍吾は、其奴を縛り上げて、だんだん、責めつけた所が、と一へ隠し切れないで何もかも白状して、龍吾に降参しまして、取り上げられた法螺貝の外に、又た不思議な陣笠を以て居たのを、夫も龍吾に献上して、夫でやつと命を助けて貰うことになりました。其陣笠とゆーのは、まことに不思議な力があつて、夫を頭に冠つて押しつけると、忽ち二十四門の大砲が、顯われるとゆー、まことに奇妙な品であります。

さし、こゝなつて見ると、龍吾わ、大變に豪い者になつた。御馳走の出る古手巾に、家來の出る金槌に、夫から、何百人とも數知れぬ軍勢の出る法螺貝に、も一一つ二十四門の大砲の出る陣笠だ。

そこで、龍吾わ考にました。もー大丈夫。これ丈けあれば、  
 己わ天下敵なした。やれく正月早々随分、辛抱したが、其代  
 り大した福を見附けたもんだ、どれほつく歸つてやろーか  
 な、などゝ考えながら、家え歸ることになりました。

\* \* \* \* \*

夫から、龍吾わ、方々を見物して、やつと正月もすぎで、二  
 月の始の頃に、自分の故郷に歸ることになりました。所が、丁  
 度歸つて見ると、大變な騒が持ち上つて居た。とゆーのわ、  
 一体、龍吾の國では以前からしきりと盜賊どもが、出沒徘徊  
 て、良民を苦しめて居たのだが、この頃の不景氣につれだん  
 ぐ烈くなつて、丁度龍吾が歸つた時にわ、この盜賊どもが

何百人とゆへ大勢となつて市中を荒らしまわつて居た所でした。

龍吾の兄様の金一に銀造の二人などわ、前に澤山な金や銀の塊を拾らつて歸つて夫で以て、立派な家などを建てゝ居たのが、此盜賊の爲めに。丸で跡形もなく焼かれてしまつたり、其他の人たちも、皆家を焼かれたり、お金を盗まれたりするもんだから、役人たちも驚いて、大勢の兵隊を出して、打ち退けよーとしたのだが、賊の勢が強い爲めに、皆あべこべにうちまかされて逃げ返つてくる様な有様で、この事がとく國王までも聞えて、國王からわ懸賞で以てこの賊を征伐する勇者を探すことになりました。

そーゆー所え 龍吾が歸つて來たもんだから、すぐれ役所え  
 出で、この盜賊どもわ、私が征伐して打ち亡しましよーと申し  
 出ました。

そこで、龍吾が大將になつて、れ役所からわ、れ役人だの澤  
 山な兵隊がついて出て行きますると、向ーから、數知れぬ賊軍  
 が弓を射たり、鐵砲を打つたりして 勢よく進んで來る。其勢  
 に恐れて、ついて來た役人だの兵隊だのは、もーそろく逃げ  
 始めた。けれども、龍吾わ 少しも恐れないで、たつた一人  
 で づんづ 敵に向つて進んで行つた。賊どもわ、龍吾を見て、  
 たつた一人だと思つて ますく悔つて やつて來た所を見計  
 らつて 龍吾わ 例の金槌を出して 一つたよくと 大きな男

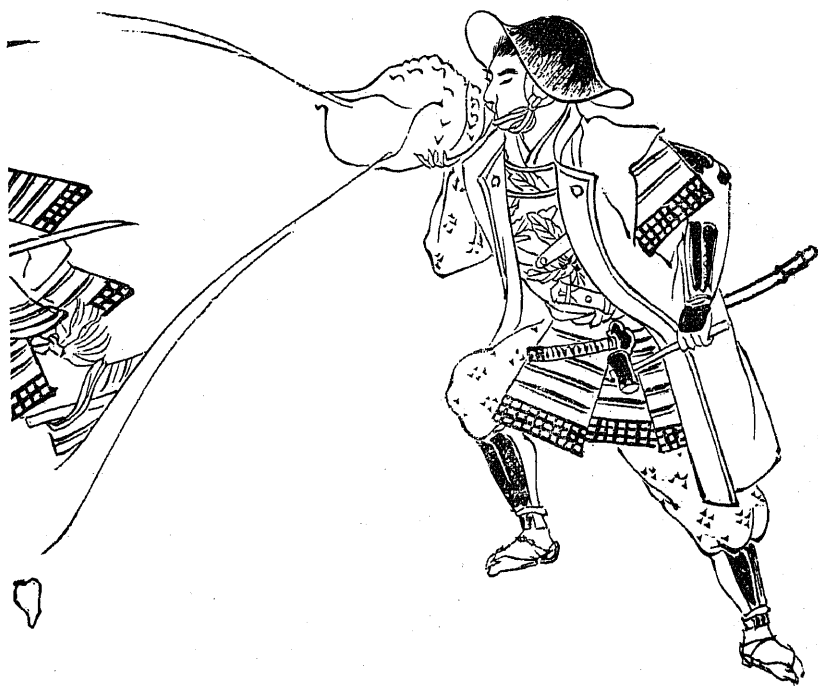


が甲冑よろいを着つけて ぬっと出でて來きて、『何か御用ごようわ』と聞きくから、『オー、あの軍勢ぐんせいの中なかに分わけ入いって 賊ぞくの大將たいしやうを打うち取とれ』と命めい令れいを下くだすと『かしこまりました』と言いって 大男やまおとこわ 電光いんぱんの樣ように 賊ぞくの中なかえ 驅かけ入いって仕舞しまいました。續つづいて 龍吾りゆうごわ、腰こしにぶら下げた法は螺貝らがいを出だして、一いつ聲せい高たかく吹ふきたてた所ところが、さー出でたとも 出でたとも 何千なんせん人びんとも知しれぬ軍勢ぐんせいが、一いち度どにとつと列れつを造つくって顯あらわ

れた。

賊軍ぞくぐんわ 此この有あ樣さまに驚おどいて、さてわ、敵てきの伏勢ふくせいにかゝつたと思おもつて、急きゆうに引ひき退ひきぞかうとする時ときに、龍吾りゆうごわ、こゝぞと、冠かむつて居いた陣笠じんがさを抑おさえた所ところが、二十四門じゅうにじゅうよんもんの大砲たいぱうが、ずつと其處そのところえ并ならんで出でた。そこで龍吾りゆうごわ、『すゝめつ』打うてつ』と號令ごうれいをかけると、軍ぐん

勢どもわ、「わーっ」と  
叫んで突進む、二  
十四門の大砲わ一度  
にドーンドーンと  
打ち出す。賊どもわ  
這々の体で狼狽え  
騒いで逃げ出すを追  
っかけ追っかけ  
進んで行く中に、例  
の大男わ、逃げる敵  
の真中から賊の大





將の首を取つて、刀の尖につき通して、龍吾の所え持つて來ました。

此軍で以て、さしもに烈しい賊どもも、残らず討死したり、又わ降参したりして、一人も敵對するものがなくなつて仕舞つたので、龍吾わ例の法螺貝だの、陣笠だの、金槌を仕舞つてしまふと、軍勢も大砲も大男も、すっかり消えて仕舞いました。そこで擒にした盜賊どもを、珠數繫ぎにして一人で以て役所え引つ立て、歸つて行きました。

さう、こゝになると、龍吾の評判わ、大したものので、とて國王からお召しになつて、澤山な褒美を頂いた上に、此國の軍隊の總大將軍とゆゑ立派な役になりましたとさ。めでたしく